

『宋元書景』をめぐる二三のこと

——黎明期の古籍影印事業の試み——

稻 畑 耕 一 郎

一、はじめに

臺灣の中央研究院歴史語言研究所の傅斯年圖書館には數々の貴重な古籍が所藏されていることはよく知られていよう。その中でも「鎮館三寶」としてとくに珍重されるのが、北宋本『史記』、宋蜀刻本『南華眞經』、南宋本『文苑英華』である。このうち前二者は胡適が傅斯年を介して傅増湘から中央研究院に譲り受けたもので、それに關わる檔案文書が今も傅斯年圖書館には大切に保存されている。⁽¹⁾

數年前、これらの書物を調査したおり、宋蜀刻本『南華眞經』のなかに舊藏者の傅増湘の自筆の「題跋」が綴じ込まれていることを知った。その文章には、傅増湘がこの宋蜀刻本『南華眞經』の存在を知った経緯について觸れた次のような一

文があつた。⁽²⁾「圖一」

余辛亥冬、以南北議和、留滯上海、曾見寶硯巖手校宋本、所據爲安仁趙諫議本。嗣歸於涵芬樓、余假出臨校於世德堂本、未得終卷而罷。然緣此知莊子自世傳數本外、又有趙諫議本矣。壬子春、聞有宋刻莊子出於滬肆。亟訪藝風老人詢之、云正是趙諫議本、以倉卒寓目、祇影寫首葉存之。卽刻入宋元書影者是也。余遣人四索、渺然無蹤、悵惘彌日。

辛亥革命のあつた年、一九一一年（宣統三年）の冬十二月、傅増湘は袁世凱政權の全權代表であつた唐紹儀の顧問として上海に赴き、そこで沈巖（寶硯）が對校に用いた「安仁趙諫議本」なるものの存在を知る。その後、その校本が、上海商

於著錄者天祿前編有南宋巾箱本運古堂有金本士禮
居有南宋本皆已散佚無存涵芬樓有北宋本四卷南宋本
六卷海源閣有南宋精刊本此外多為摹圖立注本出於
閩中坊刻不足貴也至蜀刻本為古今藏書家所未見余
辛亥冬以南北議和留滯上海曾見沈寶硯藏本按宋本
所據為安仁趙諫議本嗣歸於涵芬樓余假出臨校於世
德堂本未得終卷而罷然緣此知莊子自世傳致本外
又有趙諫議本矣壬子春閱有宋刻莊子出於滬肆亟
訪菰風老人詢之云正是趙諫議本以倉卒寫目祇影寫

首葉存之即列入宋元書影者是也余遣人四索渺然無
蹤懷惘然日滋探知此書出秣陵張幼樵家以兵亂散出幼
樵之書多得之外舅朱子清宗丞宗丞久官京曹日游殿
市怡府藏書散出時多獲古本秘籍出或其中之一鱗耶
旋同歸於泰中某君嚴扁深鏤秘不示人迨歲主人遠游
先鎗偶跡流出仿肆為文祿堂王晉卿所得徧走南方
其商賈仕之門咸未得嘗乃携之北還迨及歲除囊書相
示披函展玩心目為開觀其字體豐勁鐫工樸厚望而辨
為蜀刻然此書歷歷寶硯之舊勘菰風之影摹皆親見

〔圖一〕

務印書館の編譯所に開設されていた藏書室涵芬樓に收められ
たことから、傳增湘はこれを借り出して世德堂本（明嘉靖のこ
ろの吳郡の人、顧春の室名。そこで刊行した「六子全書」本の『南華
真經』）と對校を始めたところ、「安仁趙諫議本」なる版本が
それまで傳わっていたものとは異なる系統のテキストである
らしいと知る。次いで、その翌年壬子の春、上海の古書肆に
「宋刻莊子」なるものの出たことを耳にした傳增湘は、すぐさ
ま藝風老人繆荃孫を訪ねて問うたところ、果たして「安仁趙
諫議本」であるという答えであり、その首葉を『宋元書影』
に入れたということであつた。その後、傳增湘は八方手を盡
くしてこの書物の行方を探し求めたが、杳として行方は知れ
ず、これより三十年後の一九四一年の年末に至つてこの書物
を手にすることになる。この「題跋」はその翌年の「壬午暮
春」、すなわち一九四二年の春に書かれたものである⁽³⁾。

この文章を読んだとき、後段に言う『宋元書影』とは、す
なわち民國年間に上海の有正書局から出版されたという四冊
本の『宋元書影』（不分卷）のことであろうと思つた。その書
物は、別名を『宋元書式』といい、書肆の名などの刊記を欠
くものが大半であるが、宋元書百四十種の書影を四部に分類
し四冊本として收めている石印本である⁽⁴⁾。一九九八年三月に

江蘇廣陵古籍刻印社から線装本として出されたものも、また二〇〇三年五月に北京圖書館出版社から出された『珍稀古籍書影叢刊』に収められたのも、いずれもこれを復印したものであるので、現時點で「宋元書影」と聞いて、この四冊本の『宋元書影』を思い浮かべるのは、それほど見當違いのことではなかった。

ところが、しばらくして後、確認のためにこの『宋元書影』に当たってみたところ、その中のどこにも宋蜀刻本『南華眞經』の首葉は見あたらず、収録されていたのは宋の林希逸『莊子庸齋口義』（元刊本）の卷八「雜篇徐無鬼第二十四」の第一葉だけであつた。〔圖二〕

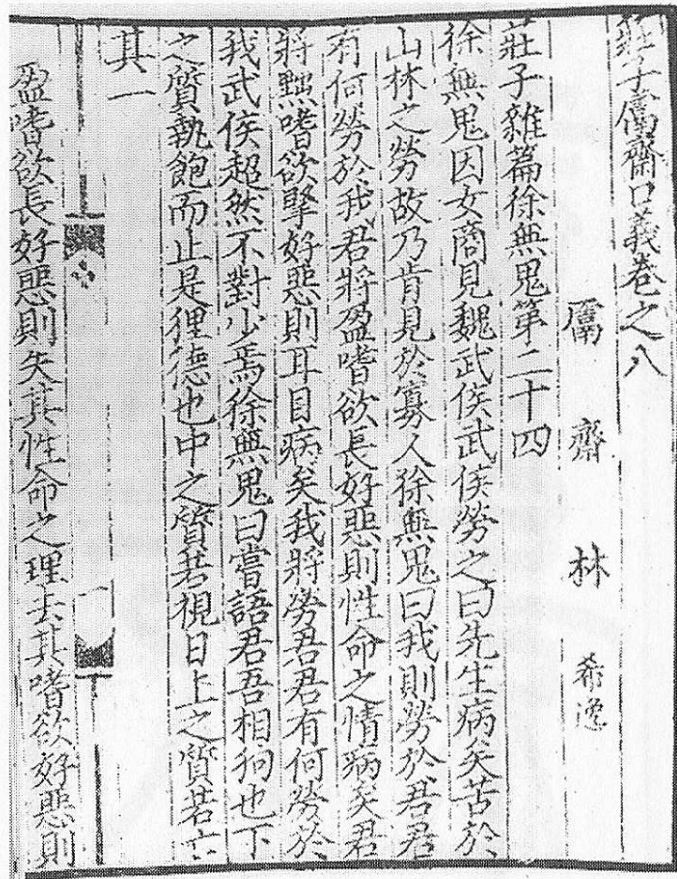
それでは、傳增湘がここに言う「安仁趙諫議本」の『南華眞經』の書影を収めたという『宋元書影』とは何を指していったものであつたのか。實は、この石印の四冊本とは別に、民國初期に刊行された『宋元書景』と題された木版の一冊本の書物があつて、「安仁趙諫議本」の『南華眞經』の書影はそちらに収められていることが判明した。

事實としては、ただそれだけのことであり、事はわが不明に始まつたことではあるが、この間の『宋元書景』の調査の中でわかつてきた興味深い幾つかの事實があり、それをここ

『宋元書景』をめぐる二三のこと（稻畑）

に報告しておくこととする。

そもそも、こうした書影本は今日では等閑視されることが多く、本格的に取り上げた論考は決して多くない。⁵⁾しかし、考えても見れば、この一世紀あまりの間、この種の影印本の存在と流布が、どれほど古籍善本との距離を縮めたことか。それが古典學の進展に果たした功績は計り知れないものがある。清末民初は、この古籍「影印」事業の黎明期にあたるが、



〔圖二〕

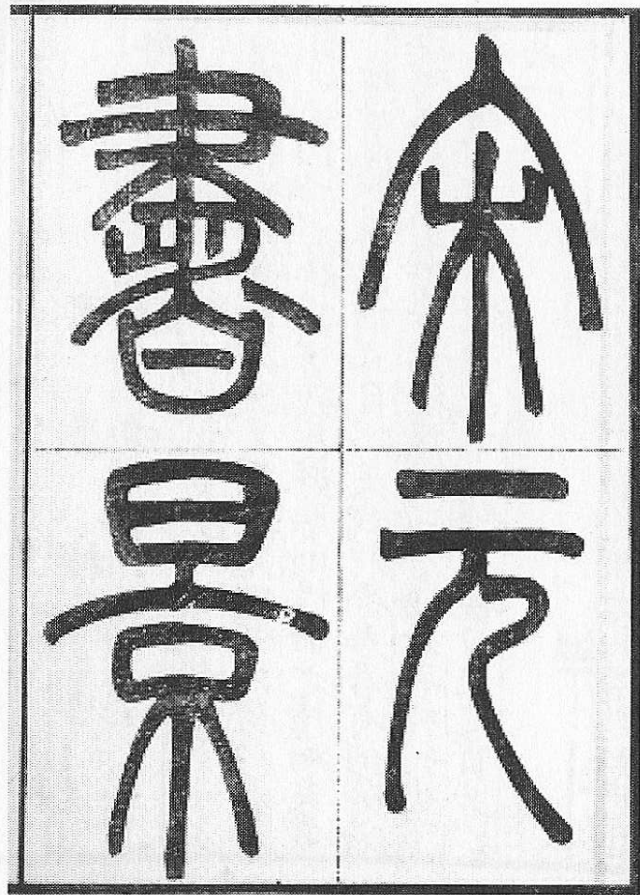
その後の各種の複製技術の急速な進展のために、かえって忘れ去られてしまった問題も少なくないように見受けられる。

なお、『宋元書影』と『宋元書景』とは、音義はともに同じであり、そこで内外の圖書館の書目類でも両者は混用され、その結果これまで兩者の違いを十分に認識されずに來ている。そこで、兩者の混亂を避けるために、本稿ではあえて文字を變えて論を進めることにする。

二、『宋元書景』について

四冊本の『宋元書影』は、書肆が販賣用として諸方面からかき集めて作った石印本のように、近年はその複製本も出ているので、これを架藏するところは比較的多い。その一方、『宋元書景』は原來が一部の文獻學者の間での参考用として配布されたもののようで、現在では所藏するところも少なく、必然的に手にとって見る機會も稀である。しかも、これまた、書物それ自體に刊記がなく、本自體からは編者名はわからず、收録される書影にも各本において繁簡出入りがあつて一定しない。書名は表紙の内側の書扉に小篆で「宋元書景」と記されているものを取った。〔圖三〕

これまでに調査することのできた『宋元書景』は、次の所

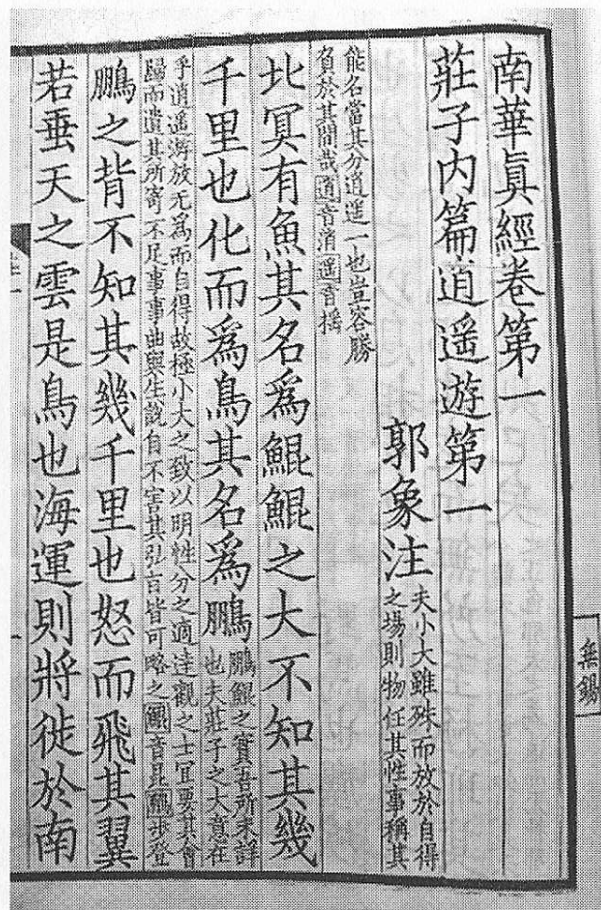


〔圖三〕

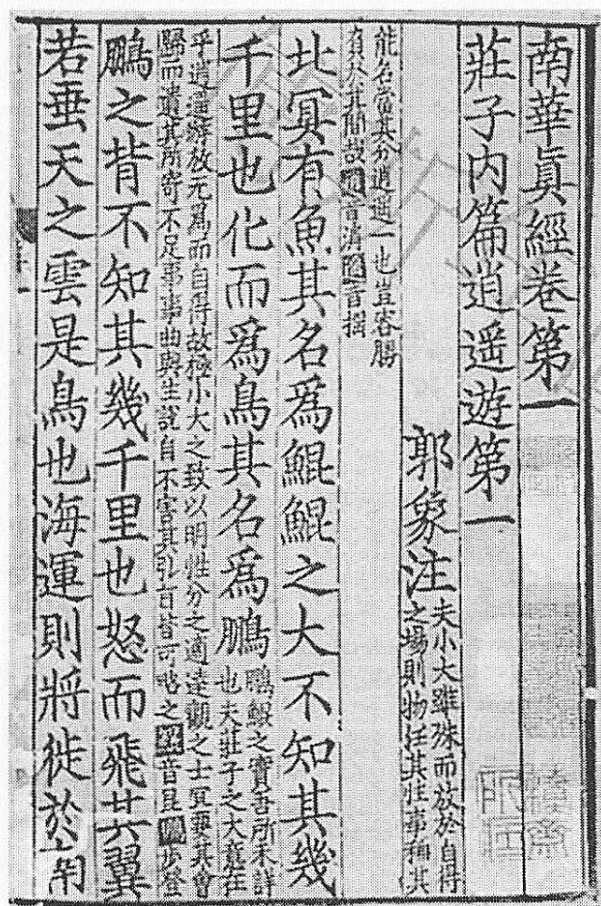
藏機關のものである。

- ① 中國國家圖書館藏本（四種）
- ② 上海圖書館藏本（一種）
- ③ 東京大學総合圖書館藏本（一種）
- ④ 京都大學人文科學研究所東アジア人文情報學センター藏本（一種）

さて、このうち中國國家圖書館所藏の一種を除いて、「安仁



[圖四]



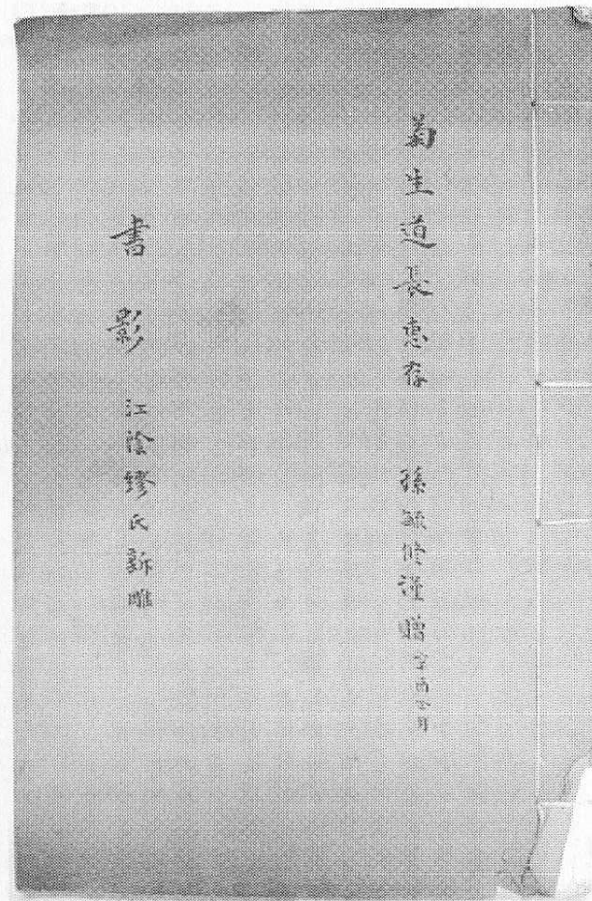
[圖五]

趙諫議本」の『南華真經』第一卷第一葉の書影が収録されていることは確認できたが、傳斯年圖書館に所藏される原本と對照すると、少し違つた印象を受ける。「圖四」「圖五」

まず、書影の方は原本（傳斯年圖書館藏本）にはない版框の右下に書耳が付け加わっている。文字の字體も原本よりやや細身で、音注の被注字の部分（白抜き）であるのに、黒圈はあるものの地の文と同じ陽文になっている。これは、どうしたことであろうか。

『宋元書景』をめぐる二三のこと（稻畑）

この間の事情を解き明かす上で、手がかりとなるのが上海圖書館に所藏されるテキストである。この書物は、他の機關に所藏されるものと比較すると収録する書影に缺けたもの（いわゆる缺葉）が多く、不全本といつてよいものであるが、その封面に「菊生道長惠存、孫毓修謹贈、辛酉正月」という獻辭とともに「書影、江陰繆氏新雕」の題字が見える。「圖六」すなわち、この書物は、一九二一年（民國十年）の正月、孫毓修が張元濟（菊生）に贈つたもので、藝風老人繆荃孫が新たに



「圖六」

刻したものであるとの説明がついている。

孫毓修は繆荃孫の高弟であることから、その「繆氏新雕」という説明はまず間違いないことと思われるが、それに關連する記録は、繆荃孫自身の手になる『藝風老人年譜』にも残されている。その「宣統三年辛亥、年六十八歲」の條に「刻本館宋元本書留眞譜」とあり、その注記として「本書一葉、牒文・牌子・序跋・述源流者、均摹之、加考一篇」と見える。^⑥ この『年譜』には「留眞譜」とあつて、「書影」とも「書景」

とも記されていないが、その注記から判斷するに、これがその後『宋元書景』としてまとめられるものの「原型」であつたと思われる。「原型」であつたということの意味は、後文で觸れる。

『藝風老人年譜』のいう「本館宋元本書」は、繆荃孫がこの前年に張之洞の要請を受けて正監督（館長職）を引き受けた「京師圖書館」の所藏本のことをいうのか、それともその前身の清の「學部圖書館」のものを指すのかはつきりしないが、兩者は直接の繼承關係にあるので、實態は同じである。『宋元書景』は版框の外に出た書耳に原本の所藏者の名を記しているが、それを参考にすると、ここに收められる宋元版の書影全四十一種のうち、「學部圖書館」のものが十二種と最も多くを占め、次には繆荃孫自身の「藝風堂」所藏のものが九種あり、兩者を併せると全書影の半數を上回^⑦る。このことも、繆荃孫の關與をうかがわせるに足る材料である。周知のように、學部圖書館の所藏善本書目（『清學部圖書館善本書目』）は繆荃孫が編纂したものであり、そこでの孤本善本の所藏狀況は最も良く把握していたはずである。

しかも、繆荃孫は數多くの書物の編纂と木版での出版を手がけており、彼の元では優れた書寫職人や刻字工が活動して

(8) いた。百葉足らずの冊子を「影刊」することなどは容易なことでであつたと思われる。この當時、すでに石印印刷は行なわれ始めていたが、まだ寫眞撮影を利用しての製版技術は十分に確立されておらず、そこでこうした舊來の「覆刻」「影刊」の方法が取られたものと思われる。

すなわち、底本となる宋元版は切り離して版下とすることはできないので、まず底本のうえに半透明の薄紙を重ね、行款、點畫すべてをそのままそっくり影鈔（トレース）し、その紙を反轉して版木に貼り付けたあと、これに従つて彫る（影刻）というやり方であつた。音注の文字が底本では白抜きの陰文であつたものが陽文に變つてしまつたのは、版下となる寫しの原稿がそうであつたからである。

實は、宋蜀刻本『南華眞經』の首葉を影鈔したのは、孫毓修であつた。すなわち、孫毓修が民國十一年（一九二二年）十月に書いた「莊子札記」が、『四部叢刊初編』に收められた明世德堂刊本『南華眞經』の卷末に收録されており、そこには次のような文が見える。

辛壬間、滬市出宋刻莊子、卷末有二行、云安仁趙諫議宅一様□子（様字下一字爲人挖去。續墨客揮犀七、木饅頭、大中祥

『宋元書景』をめぐる二三のこと（稻畑）

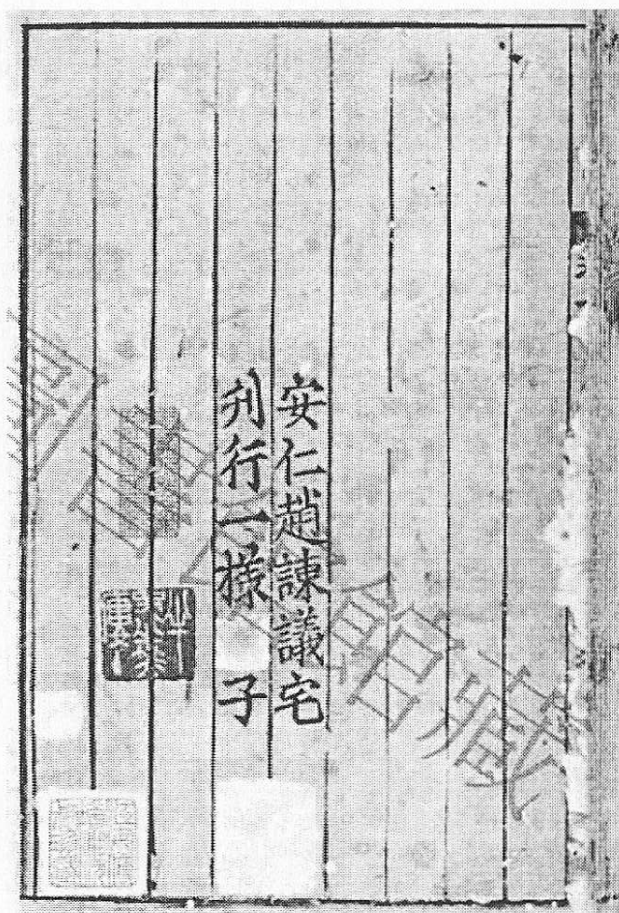
符年一様造五十隻。以此例之、挖去者必爲數目字矣。趙氏所刻、蓋不止莊子）。……北宋人刻古書、音義輒附卷後、不應莊子音義散入注下、疑南宋人所爲、趙氏原刻不爾也。趙本每葉十八行、行十五字、注倍之。予既借校於世德堂本上、又手摹一葉與繆藝風先生、今刻入書影者是也。後見雍正中沈寶硯校本、一様下亦闕一字。蓋所見卽此本矣。叢刊中以世德堂本影印、復錄趙本異同如左。壬戌十月。留菴居士孫毓修。

「辛壬間」とは一九一一年（辛亥、宣統三年）から翌一九一二年（壬子、民國元年）のことであり、孫毓修はこのとき「安仁趙諫議本」の『南華眞經』の牌記を確認し、世德堂本に校記を書き入れ、さらに一葉を「手摹」して、先生である繆荃孫に献上している。しかも、それは「書影」に入れられたともいう。これによれば、現在『宋元書景』において私たちが見る書影の書寫原稿は孫毓修が手ずから寫し取つたものということになる。

『宋元書景』に收録された書影の耳に所藏機關の名が記録されていることは先にも述べたが、この『南華眞經』だけはただ「無錫」という地名を記すだけで、所有者の名を明示していない。これが孫毓修が書寫したものであるということにな

れば、その間の事情も理解できる。「無錫」とは、無錫城郊孫巷の人、孫毓修その人を指すからである。師の繆荃孫との間ではあえて名前を出すまでもなかったのであろうし、そもそも書寫したのは孫毓修であっても、書物の所有者は孫毓修ではなかった。そこで他の書影のように、「無錫孫氏藏」と記せなかったのである。

また、この書物にとって最も重要な「牌記」の「安仁趙諫議宅刊行一様□子」の部分「圖七」が『宋元書景』に採録さ



「圖七」

れていないのも、孫毓修が提供したのが「一葉」だけだったからであるということとで納得がいく。そのような経緯を知れば、傳増湘の「題跋」に残された繆荃孫の「以倉卒寓目、祇影寫首葉存之」という言葉からもその本意さがよく傳わってくる。なお、この時点では、繆荃孫も孫毓修も系統の異なる南宋本であることはわかっていたが、蜀刻本であるとの理解はなかった。

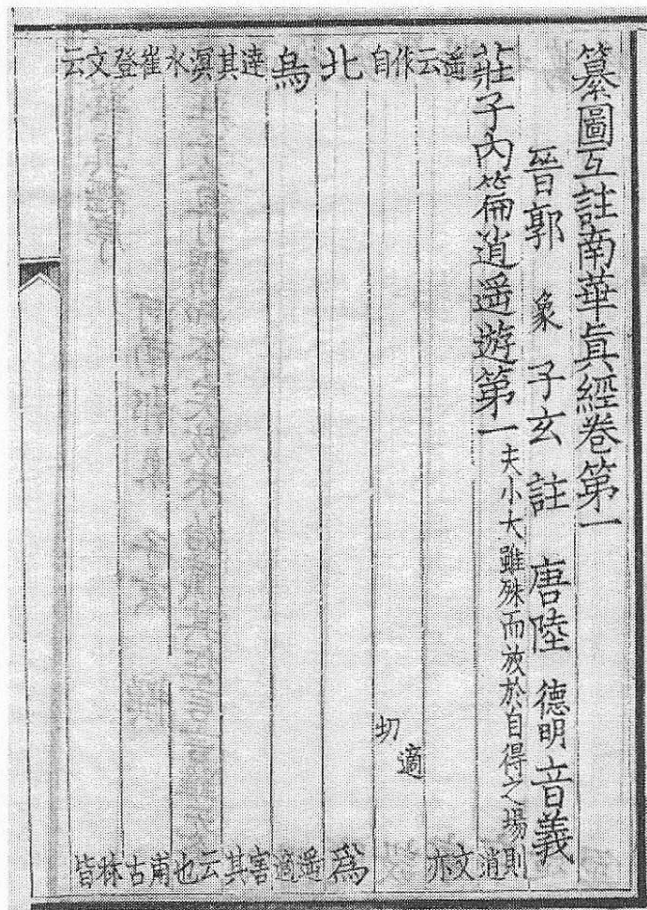
三、『留眞譜』と『宋元書景』

次に問題となるのは、書名が自訂『年譜』では「宋元本書留眞譜」といい、現在見ることのできるのは、『書影』、あるいは『宋元書景』であることについてである。この書名の違いについても、若干の考察が必要であろう。

古文獻を扱う學問は元來が實物を手にとって比較検討することができなければ、なし得ない仕事であつたが、この當時、清朝一代を通して培われた考證學の實事求是の學風がこの分野にも及び、實物に即して校勘を施したり、版本の系統を研究しようとしたりする氣運がいつそう強まってきた。それに伴って、從來の半葉何行、行何字、單魚尾、白口などといった行格や版框の文字説明だけでは、古籍の實態を十分に反映

できないという認識が生まれた。その考えのもとに企畫され刊行されたのが、楊守敬の『留眞譜新編』であつた。⁽¹⁰⁾

楊守敬はこれより先、『古逸叢書』の日本での刊行の實務を擔當するにあつて、その事業のきつかけを作つた『經籍訪古志』の著者のひとり森立之を尋ねることがあつた。そのとき、立之の元に古鈔本をそつくり「模寫」した『留眞譜』と題された冊子のあるのを目にして、これを懇願して譲り受



[圖八]

けた。そして、これを雛型として宋元版の「影刻」に轉用することを思い立つた。⁽¹¹⁾

この『留眞譜新編』十二冊には、當時、見ることの稀な古籍善本や古鈔本、和刻本などを含め、三百九十三種もの書影が収められた。もとよりそれほど多くのものを一度に全卷に及んで複製するには、經費も時間もなく、多くは一葉か二葉、あるいは半葉、それも一行の上下の一字だけを翻刻するだけであつた。〔圖八〕今から見れば、一種の原寸大の見本パンフレットのようなものではあつたが、容易には見ることでできない善本寫本の書影が大量に収めており、從來の記述式の半葉何行、行何字、單魚尾、白口などといったものからすれば比較にならないほど具體的なものであつた。そこで、『留眞譜新編』は學者の間で重寶なものとして歡迎され、その後、續く各所藏機關の「書影」本の先驅となつた。舊來の傳統的な木版印刷の方法を用いての「影印」であつたので、今にして思えばそれはまるでコロンプスの卵のような事業であつたといえる。⁽¹²⁾

この『留眞譜新編』の刊行は、光緒二十七年（一九〇一年）四月のことであつたが、楊守敬はその後もさらにこの事業を續け、新たに百七十五種を加えて『留眞譜二編』として刊行

した。⁽¹³⁾ 刊行されたのは民國六年（一九一七年）、楊守敬が没した二年あまり後のことである。

この間にあつて、繆荃孫は楊守敬の『留眞譜』の仕事に觸發されて、同様の「宋元本書留眞譜」の刊行を思い立つたものと思われる。書名に当初は「留眞譜」を冠したのも、そうしたことによるのであろう。その注記に「本書一葉、牒文・牌子・序跋・述源流者、均摹之、加考一篇」（『藝風老人年譜』）というのは、文獻學上の當然の配慮ながら、楊守敬が『留眞譜新編』の卷頭の序文に、森立之の『留眞譜』を紹介して、「余於日本醫師森立之處、見其所摹古書數巨冊（或摹其序、或摹其尾、皆有關考驗者）、使見者如邁眞本面目、顔之曰留眞譜」という文章の注記部分（丸括弧内）と呼應するであろう。

繆荃孫が楊守敬の『留眞譜』を見ていたことは、その日記である『藝風老人日記』⁽¹⁴⁾の「辛丑日記」（一九〇一年）の五月十七日、すなわち『留眞譜新編』が出た翌月に「寄留眞譜八冊、二妙集文集刻本」とあることによつて確認できる。ここには、誰のもとに送つたのかは記されていないが、『貴池二妙集』は、友人の藏書家劉世珩（聚卿）の輯になるものであるので、おそらくは劉世珩に送つたものと思われる。次いで、同年九月十日の日記に「聚卿還留眞譜」とあるのは、その時

のものを返却したことをいうようである。

さらに翌年（壬寅、一九〇二年）の十月二日には「聚卿託選留眞譜」とある。これによれば、繆荃孫に新たな『留眞譜』を作ることを勧めたのは劉世珩のようである。繆荃孫の豊富な藏書と見識、またその財力と出版の經驗を持つてすれば、別のかたちの『留眞譜』ができると思つたのであろう。これが自訂の『藝風老人年譜』の最終年「宣統三年辛亥」（一九一一年）にいう「宋元本書留眞譜」につながるものであろう。

しかし、この書物は「宋元本書留眞譜」という名で刊行された形跡はなく、刊刻にあたつては名を『宋元書景』と改められた。その理由は、『藝風老人年譜』がここでのいうのは「本館宋元本書留眞譜」であつて、やがてそこに收録される書影が「學部圖書館」の所藏の範圍を超えて、他の所藏者のものを含むまでに擴大したことの結果であらう。『年譜』にいう「宋元本書留眞譜」が今日見るところの『宋元書景』の「原型」であるというのは、こうしたことからである。

四、『宋元書景』の刊年

この繆荃孫の手になる書影本の後の増補の次第は、やはり『藝風老人日記』などの記述を追うことによつてうかがうこと

が出来る。

たとえば、まず『日記』の「乙卯日記」、すなわち民國四年（一九一五年）の正月三日には、「定留眞譜書景、止十九種目、藏書十種」とあつて、「留眞譜」と「書景」とが併記されているが、このころには収録すべき書目の選定はひとまず終つていたようである。

次いで、これが版に起こされたことが、翌年の「丙辰日記」、すなわち民國五年（一九一六年）十一月二十六日の條に「發常熟丁秉衡信、並宋元書影^{ママ}紅印刊」と見える。このころ上海に寓居していた繆荃孫は高弟のひとりである常熟の丁秉衡に手紙とともに『宋元書影^{ママ}』の初校刷（「紅印」本）を送つたというのである。さらに「戊午日記」（民國七年、一九一八年）三月二十二日には、「發祿保信、寄宋元書影^{ママ}四本」と、出来上つたものを長子祿保のもとに送つたことが記されている。このころにはすでに繆荃孫にも「宋元本書留眞譜」としてではなく、『宋元書影』として認識されていたことがわかる。

それでは、民國七年には、『宋元書景』（『日記』にいうところの『宋元書影』）は完成していたかというところ、必ずしもそうではない。それは、「己未日記」、すなわち民國八年（一九一九年）三月二十五日の條に「影寫家藏宋版書、入宋元書影」という

『宋元書景』をめぐる二三のこと（稻畑）

一文が見えるからである。そして、同年七月十一日には「排好宋元書影、交子林卅元、饒心舫來問詩詞寫法」とある。子林は刻字工の陶子麟のこと、饒心（星）舫は版下の字などを書いてきた書家である。この時、ようやく完成版の書影の順序が定まつたということのようである。こんな風にして『宋元書景』は時を追つて収録の書影の数を増やしていったのだろう。調査することができた七種の『宋元書景』に収録される書影が繁簡入り交じっているのも、おそらくはこのことと関係があろう。

この時の「家藏宋版書」が何であつたかはわからないが、『宋元書景』としては最後に収録された書影となつたはずである。なぜなら、この民國八年の十一月一日、繆荃孫は七十六歳をもつて亡くなるからである。⁽¹⁵⁾ その直前の閏七月四日に「發陶子麟信、寄翁詩・宋元書抄封面籤子」とあり、この「宋元書抄」は『宋元書景』のことであろうから、この時になつたようやく封面に記される題箋の文字の刻字が發注されたことになる。⁽¹⁶⁾

これらがすべて出来上つて繆荃孫のもとに届けられたのが、同年十月一日のことで、その日の日記に「陶子麟寄宋元書影來」とある。さらにその十數日後には「饒心舫來、帶來宋元

書影三十冊」(十月十五日)とあり、まとまった部数の完成品が饒心舫(饒星舫)によって直接届けられたことがわかる。

以上、今日見るところの『宋元書景』の成書の過程を整理すると、かりに清末「宣統三年」に着手されていたとしても、それは「學部圖書館」が所藏する宋元書に限られ、他の所藏機關のものは含まれていなかったであろう。『藝風老人年譜』「宣統三年」の條が言うのは「本館宋元本書留眞譜」であつて、そこに他の機關のものが含まれていたとは考えがたい。『宋元書景』という書名も、明らかにその時點では決まっていなかった。それを「原型」として、やがて民國年間に入ってから他の所藏者の協力も得て、より規模の大きなものに發展していった。それは、時とともに増加し、最終的に完結したのが、繆荃孫の亡くなる直前の民國八年(一九一九年)十月のことであつた、と結論づけることができる。⁽¹⁷⁾

なお、この『藝風老人日記』には、傳增湘の名もしばしば登場するが、この『宋元書景』に關した記録としては、「己未日記」(民國八年、一九一九年)六月二十五日に「應傳沅叔信、還韻語春秋一冊、送宋元書影一冊」と見える。これは、傳增湘がその前年一九一八年の一月十五日に繆荃孫に送った書簡

の中で「前年見所刻古書留眞譜、已成帙否」という問いあわせに答えたもののようである。⁽¹⁸⁾この時には、『宋元書景』はほぼ最終版に近づいていたので、その中に傳增湘が見たいと願っていた蜀刻本『南華眞經』の首葉の書影も入っていたであろう。しかし、この時點では、傳增湘はまだ蜀刻本『南華眞經』の原本を手に入れていなかった。

五、『宋元書景』が果たした役割

清末民初に楊守敬の『留眞譜新編』と繆荃孫『宋元書景』が出て一世紀あまり、この間の急速な印刷技術の進展によつて、眞跡を一等下るか、さらには眞を亂すかとも見紛うばかりの「影印」本が生み出されるまでになった。我々窮措大の書棚にまで宋元本(の複製)が並ぶのはその餘慶以外のなものでもない。そうであれば、その事業の出發點がこの清末民初の先人たちの苦心と工夫のうちにあつたことを銘記しておくことは必要なことではあるまいか。

本稿で取り上げた『宋元書景』についていえば、今では見本カタログの域を出ないようなものであつたとしても、まずその當時は格段と重寶なものであつたろうし、それが繆荃孫の眼力を通して選ばれているということと學者仲間の間での

信賴感もあつたろう。孫毓修が張元濟にこれを贈ったのも單に恩師の遺作だからというだけではなかつたはずである。張元濟のその後の數々の「影印」事業の資に供せられたはずである。また『宋元書景』には各書影の當時の所藏先が明示してあることによつて、流通の過程を知ることができ、底本との對照の手がかりを明確に残しておいてくれたという意義も大きい。これは先行の楊守敬の『留眞譜』にはなかつた配慮である。版面も當時の石印の影印本に較べ、はるかに鮮明で迫眞性がある。

またこの繆荃孫の『宋元書景』は、古籍の影印事業において、『留眞譜』に代わつて「書影」という名稱を定着させることとなつた。この後、民國年間にはこれに倣つて、瞿啓甲『鐵琴銅劍樓宋金元本書影』（一九二二年）、柳詒徵『益山書影』（一九二八年）、劉承幹『嘉業堂善本書影』（一九二九年）、故宮博物院圖書館『故宮善本書影初編』（一九二九年）、故宮博物院文獻館『重整內閣大庫殘本書影』（一九三三年）、王文進『文祿堂書影』（一九三七年）、陶湘『涉園所見宋板書影』（一九三七年）など「書影」と名付けた書物の出版が続いた。やがてそれらの中には『圖錄』と命名されるものも多くなつたが、それらを含め、書目類には「書景」「書影」という項目が新たに存置

『宋元書景』をめぐる二三のこと（稻畑）

されることになつた。これは繆荃孫の『宋元書景』から始まるものである。

そうした目錄學史上の意義を有するもかわらず、近年、北京圖書館出版社から出版され『珍稀古籍書影叢刊』にも繆荃孫の『宋元書景』は收められることはなく、その存在が忘れ去られようとしているのはまことに遺憾なことではないか。⁽¹⁾

注

- (1) これらの「鎮館三寶」は、通常は嚴重な書庫の中に秘藏されていて、特別な許可がないと閲覧を許されないが、二〇〇九年十月一日から二〇一〇年二月十日までの間、併設の歴史文物陳列館で開催された「知來藏往——史語所慶文獻特展」にそれぞれの一冊が出品され、同時にそれに關わる胡適から傅斯年への電文（『史語所檔案』雜三六—四四—一、一九四七年四月二十四日）や書簡（『傅斯年檔案』一—一六七〇、一九四七年五月十一日）などの關連資料も展示された。その中の一つ「歷史語言研究所出納室致北平圖書史料整理處函」（『史語所檔案』補二三—一〇八、一九四七年九月十六日）によれば、北宋本『史記』四十冊の讓渡價格は、當時の價格で一億元、宋蜀刻本『南華眞經』十冊は三千萬元であつたことがわかる。いささか俗事に涉るようであるが、歴史記錄として書き留めておく。同時にこうした斷簡零墨に至るまで丁寧に保存し、それを時機を見て

中國文學研究 第三十五期

公開することに畏敬の念を強くした。また、これらの資料は『傳斯年圖書館善本古籍題跋輯錄』（中央研究院歷史語言研究所・慶祝史語所八十周年籌備會、二〇〇八年八月刊）の湯蔓媛「敘論・天祿琳瑯外一章」のなかでも取り上げられている。

(2) 訓讀「余、辛亥の冬、南北の議和を以つて、上海に留滞し、曾て寶硯巖手校の宋本の、據る所を安仁趙諫議本と爲すを見る。嗣いで涵芬樓に歸し、余假り出し臨んで世德堂本に校するも、未だ卷を終うるを得ずして罷む。然して此に緣り《莊子》の世傳の數本自り外に、又た趙諫議本の有るを知る。壬子の春、宋刻《莊子》の滬肆に出づる有るを聞く。亟ちに藝風老人を訪れ之を詢ぬるに、云ふ正に是れ趙諫議本なり、倉卒に寓目するを以つて、祇だ首葉を影寫して之を存するのみ。即ち刻して《宋元書影》に入る者はなり、と。余人を遣はして四索するも、渺然として蹤無く、悵惘として日を彌る」。

なお、上海古籍出版社から一九八九年に出された排印本の傳熹年整理『藏園群書題記』では、引用文中の「即刻入宋元書影者是也」は「即後印入宋元書影者是也」と改められており、そうであるとする、この部分は、傳增湘の説明の言葉となる。

(3) 傳增湘の考證によれば、「安仁」は繆荃孫のいうような北宋の趙文定の名ではなく、蜀の臨邛郡の所屬した大邑縣（成都の西）の名であり、「趙諫議」はその郡からでた趙嵩の一族であろうかとし、これがそれまで知られていなかった古い系統にある宋蜀刻本であることを指摘した。詳しくは、拙論「宋蜀刻本

『南華真經』附載の傳增湘手書題詩題跋について——臺灣中央研究院傳斯年圖書館藏本——」（『早稻田大學大學院文學研究科紀要』第五四輯、二〇〇九年二月）参照。

(4) 『宋元書影』という書名は、各冊の題箋に記されるもので、これを欠くものも少なくないが、内扉には「宋元書式」と記されている。また、幾つかの現物調査をしたが、有正書局という書肆名を記すものは現在までのところ確認できていない。しばらく各所藏機關の目錄などによる。この書物の來歴については不明な點が多い。

(5) 「書影」についての專論は多くないが、本稿の参考としたものとして劉奉文・魏芳華「中國古書書影小史」（『古籍整理研究學刊』一九八七年第三期）、林申清「書影概說」（『學術集林』第十四卷、一九九八年十月）、陳先行「中國古籍稿鈔校本圖錄前言」（『中國古籍稿鈔校本圖錄』、上海書店出版社、二〇〇〇年九月）、王亮「古籍書影概說」（陳正宏・梁穎『古籍印本鑑定概說』、上海辭書出版社、二〇〇五年六月）がある。いずれも概説であるが、簡ながら要を得ており、有益であった。

(6) 『藝風老人年譜』の抄本影印は、『中國近代史料叢刊』（臺灣文海出版社、一九七〇年）第五十一輯に『藝風老人自訂年譜』として收められている。また、同じものが『中國歷代名家年譜彙編』（臺灣廣文書局、一九七一年）第一輯などにも見える。この抄本に基づいた木版本が、民國二十五年（一九三六年）到北京の文祿堂から出ている。

(7) 調査した全七種の中では、③東大圖書館本が最も多くの書影

を収める。それによれば、書影全四十一種の内譯は、「學部圖書館」藏本十二種、「藝風堂」(繆荃孫)藏本九種、「張氏適園」(張鈞衡)藏本七種、「南陵徐氏積學軒」(徐乃昌)藏本二種、「劉氏玉海堂」(劉世珩)藏本二種、「陽湖董氏」(董康)藏本一種、「劉氏嘉業堂」(劉承幹)藏本一種、「無錫」(孫毓修)一種、無記銘六種。

(8) 楊洪升『繆荃孫研究』(上海古籍出版社、二〇〇八年十二月)の第九章「編刻書研究」参照。

(9) 訓讀。「辛壬の間、滬市に宋刻莊子出づ。卷末に二行有りて、云ふ「安仁趙諫議宅一樣□子」と。(様の字の下一字人の挖去するところと爲る。續墨客揮犀七、木饅頭に「大中祥符年一樣造五十隻」とあり。此を以て之に例とせば、挖去せらるるは、必ずや數目字爲り。趙氏刻する所、蓋し莊子に止まらざらん)。……北宋の古人書を刻するに、音義は輒ち卷後に附す、應に莊子の音義は注の下に散じ入るべからず、疑ふらくは南宋の人の爲す所にして、趙氏の原刻は爾ならざるならん。趙本は每葉十八行、行十五字、注は之に倍す。予既に借りて世德堂本上に校し、又た手づから一葉を摹し繆藝風先生に與ふ、今刻して書影に入る者はなり。後雍正中の沈寶硯の校本を見るに、一樣の下亦た一字を闕く。蓋し見し所は即ち此の本ならん。叢刊中に世德堂本を以て影印し、復た趙本の異同を録すること左の如し。

(10) 楊守敬は『留眞譜新編』の「敘文」で「著錄家於舊刻書、多標明行格、以爲驗證。然古刻不常見、見之者或未及卒考、仍不

『宋元書景』をめぐる二三のこと(稻畑)

能了然無疑。余於日本醫士森立之處、見其所摹古書巨冊(或摹其序、或摹其尾、皆有關考驗者)使見者如遭眞本面目、顔之曰留眞譜。本河閒獻王傳語也。余愛不忍釋手、立之以余好之篤也、舉以爲贈。顧其所摹多古鈔本、於宋元刻本稍略。余倣其意、以宋元本補之」云々と記している。

(11) 陳捷『明治前期日中學術交流の研究—清國駐日公使館の文化活動』(汲古書院、二〇〇三年二月)第三章第四章第五節が論證するところによれば、楊守敬が森立之から譲り受けたの『留眞譜』は江戸後期の學者小島寶素の稿本であり、この寶素の『留眞譜』のものを踏襲し擴大したものである。

(12) 「新編」というのは、思うに森立之らの『留眞譜』に對して、新たに編みなおしたものという意味であり、當初はその名であつた。封面の題箋も書扉もみな「留眞譜新編」と記す。書帙には「留眞譜初編」と記すものもあるので、これを「初編」とも言うが、それが強く意識されたのは、後に「二編」ができてからのことであろう。前に出版されたものが「新編」では不適切と思われたからではないか。しかも、やがて日本における先行の稿本『留眞譜』が忘れ去られ、逆に『留眞譜』といえ、楊守敬のものということになり、次いで「二編」が出されたことから、『留眞譜初編』『留眞譜二編』として定着したのであろう。

(13) 收録された書物の數は、臺灣の廣文書局から出された『書目五編』に收められた『留眞譜初編』並びに『留眞譜二編』の目次に基づいた。この影印本はシリーズにあわせて小型化されて

中國文學研究 第三十五期

いるが、その目次に、書影ごとの書名、板本、行格、板匡、書影の葉數、題跋者の氏名、楊守敬の附記の有無、また森立之『經籍訪古志』と楊守敬『日本訪書志』での存否が記されていて、大變便利である。なお収録されている書影のうち、『論語』諸本に關しては、高橋智『室町時代古鈔本『論語集解』の研究』（汲古書院、二〇〇八年九月）の第三部・第二編の第二章「楊守敬觀海堂舊藏室町時代古鈔本『論語集解』」に詳細な追跡がある。

- (14) 『藝風老人日記』北京大學出版社、一九八六年四月。全十卷のうち八卷が日記で残りが人名と書名の索引になっている。索引はたいへん便利であるが、原寸から約四分の一あまり縮尺されているので、文字がつぶれて讀みにくいのが難點である。八卷の末尾に民國二十五年（一九三六年）到北京の文祿堂が出した木版刷りにした自訂「藝風老人年譜」と夏孫桐の「繆藝風先生行狀」がついている。

- (15) 『藝風老人日記』に付された「藝風老人年譜」に二人の子供による追記があり、没年はそれに據った。

- (16) 調査できた『宋元書景』のうち、封面に題箋を有しているのは、④京大人文研本だけであつた。その題箋には「宋元書影」とある。ただし京大人文研本は、書影のうち『廬陵歐陽先生文集』巻第一（張氏適國藏）の一葉を缺く。

- (17) 多くの所藏機關が編者名、刊年とも未記載か、不詳とするなかで、『京都大學人文科學研究所漢籍目錄』は、「清繆荃孫輯、宣統三年江陰繆氏刊本」とする。また中國國家圖書館の書目

データは「民國年間「一九二一—一九四九」とする。いずれも、それらの書物自體には刊記などそれを示すものはなく、據つて來たるところは不明であり、本稿に述べたように正確ではないと考える。

- (18) 傳增湘の繆荃孫への書簡は、『藝風堂友朋書札』（『中華文史論叢』増刊、上海古籍出版社、一九八〇年十月）に收められている。「二月十五日」に書かれたことは手紙の末尾に記されているが、その文面に、「近日始得北宋本樂府詩集、十三行廿三字」とあり、このことから一九一八年のことと判斷できる。

- (19) 『書日總編』（臺灣成文出版社、一九八九年六月）參照。『宋元書影』不分卷として、有正書局の四冊本を收めて、「繆荃孫輯」としているのは杜撰も甚しいが、各圖書館の目錄もこれを踏襲しているので注意を要する。

【附記】

本稿は、早稻田大學特定課題研究助成（二〇〇九B—〇三二）による研究成果の一部である。